終戦体験記

佐々木　美奈慈　（前原西・84歳）

あの日、そう昭和二十年八月十五日、今日は何か重大な発表があるから十二時の放送は必ず聞く様にと、自分で承知しており乍ら私は校長から学校の農園に蒔く種を探して来てくれと云われておりましたので、小使を連れて町に出ておりました。勿論十二時迄には戻る積りでした。

当時男女合せて十人の職員のうち女四人で男職員は校長以外は全部召集されて、男子は一人もおりません。夏休み中でしたけれど残った職員は校長の命令で毎日出勤しておりました。私は夏負けする体質で、夏は食欲がなくてその朝も食事をせずに出かけました。朝鮮人の小使を連れて案内させて行きました。小学校は町の南東部にあり、附近に道立病院もあり学校は広い土地を持って広い農園もあり、学校の窓の下にはさつま芋が大きくなって土をもり上げておりました。自分の家の生活必需品を買う店しか知らない私は、そっちこっちと引っ張りまわされてやっとめあての種を買い得た時はもう十二時はとっくに過ぎておりました。フラフラした足どりで家にもよらずにすぐ学校にいきました。玄関に入るとバタバタと走り出して来た女先生達が泣き乍ら私にしがみついて来ました。どうしたのと聞こうとする私に声をそろえて「負けたの」「負けたのよ戦争に」……といって又、大声をあげて泣き出しました。私はもう何も考えられません。職員室に入るなり大事に抱えて来た種の包みを力一杯床にたゝきつけました。小使のしらせに校長が宿舎から出て来られました。ブツブツ何か云っています。よく聞くと大変だ、大変だ、と言ってるのです。校長には校長の大事な仕事があったのです。目は血走っておりました。「とも角不敬事件が起っては大変だから御真影と教育勅語をしまつせねばならん。明日の朝早くやるから」と小使に青竹四本と標縄を作る縄とを作ってくる様に、そして私共にあしたの朝早く川に行ってきれいな砂を取って来る様にと云いつけ宿舎に戻って行きました。さあ大変な事になりました。フラフラなどしておれません。とに角一体何をどうすればいいのでしょう。学校へ小使一人残して私共は家に帰りました。家では娘が一人泣き乍ら教科書を探しておりました。当時私の家族は昨年の三月末にどうしても内地の中学に入りたいからと姉（長女）、食事をへらして泣いてたのむ次男と二人で内地へ引き揚げて行った中学一年生がおり、江陵（こうりょう）には高女四年の娘と私の二人きりでした。とも角朝鮮を引き揚げなければならないが、何をどうしたらいいのか狂った様な頭では何も浮んできません。とに角あしたの御真影と御勅語のしまつが先きと考えて床につきましたが、眠れそうもありません。次の朝、夜あけを待って学校にいきました。折よく来合せた女先生と一緒にバケツをさげて川に向かいました。校舎の横に大きな講堂が在りました。この講堂には一騎とうせんの兵隊さん百人が飛行機が迎えに来たら御国に

命を捧げるのだと、夏休みになると間もなく来て泊りこんで命を捨てる日を待っていました。私共はその講堂の前を通りました。何の音も聞えません。道路をへだてて道立病院が建っていましたが、ここも音一つきこえません。二人はだまりこくって堤防に上りました。その下の河から砂をとって来るのです。一杯の砂の重さも分かりません二人は学校に急ぎました。校長は小使をせき立てて校庭のまん中を少し掘って一間四方ばかりの四隅に青竹を立てて標縄を張りました。私共はその少し低くなったところに砂をまきました。やがて校長は白手袋にモーニング姿で額縁から外した御真影と御勅語を二枚重ねてあらわれました。私はマッチの火を白紙にうつして校長の捧持してる御真影にうつしました。今もその時の事がありありと思い出され胸がふるえて来ます。その灰をどうしまつしたのか、どうして家に戻ったのか記憶にありません。とに角一つの大きな仕事を片づけたという気持ちだったろうと思います。さあこれからが大変です。一体どうなるのか、親がかりの女先生達はどうにかなるだろうが、私と娘の一家は、考えれば考える程むづかしく頭が一ぱいになりました。校長さんは軍人上りでしたが御年でもあり、子供さんは皆女ばかりで相談の相手にもなりません。何日目だったでしょうか、隣りの警察官舎の奥さんが町が騒がしいので聞いて見たら小学校の講堂に泊り込んでいた兵隊さん達が本町通りまで引き出されて武装解除させられているとの事なのです。どんな気持で一体誰がそんな事をと思いました。三十八度線から十里も南なのにと思いましたが、誰かがソ連兵に密告したらしいとの評判でした。その頃学校に行って見ますと各教室にあった掛時計も全部なくなり私の目の前でミシンを運んで行く中学生と思われる男の子に私は声をかける事ができません。講堂をのぞいて見たら誰もおらずカーテンも外され椅子も大分なくなっており ました。泣くに泣けない思いとはあんな時の事をいうのでしょう。日を追って物が買えなくなって来ました。銀行（金融組合）の組合長が逃げ出してとらえられたと聞きました。払戻しは全然できません。色々集って相だんしました。そして仕方がないから物を売って金を造ろうという事になりました。町の半分位の日本人はいなくなりました。江陵（こうりょう）は東海岸では比較的大きい町なのですが、鉄道は通っておりません。金持ちはその金の力で船を買ったり自動車をやとったりして逃げ出して行くのですが、貧乏なものはどうすればいいのでしょう。九月の末頃になって私共も船を買って逃げようという話になりました。三才以上一人につき五百円という事になり、手荷物はリュックサック一つと梱包もの一家に一箇という事になりました。お金は一人千円しか持てないという次第でした。さあそうなると持ち出すものを厳選しなければなりません。お鍋も釜も売りました。昼は保安隊がウロウロ見廻りに来るので、夜だけ売るのです。売ってはいけない、買ってはいけないと止められておりました。昼約束しておいて夜運び出すより外ありません。こんな事もありました。昼来たアボジ（朝鮮語でお父さん）が、五〇〇円でミシンを買うというので夜運び出しに来るからと約束して、私は喜んで五〇〇円受けとりました。娘が外から帰って来てその話をきかせた私に、私は、今千円で売る約束をして来たからアボジに話してお金を返しなさいと云うのです。一たん約束していて悪いよと云いましたら、そんな事だから甘く見られると娘に叱られ夜になって返す事は娘に交渉して貰いました。もう何もかも目茶苦茶です。そうして母子で売ったお金は三千円たまりました。いよいよ十月七日に出発ときまりその前日の夜から持ち出す品物の検査が行われる事になりました。朝から出したり入れたり又出したり落ちつかないままに夜になってしまいました。検査官は十人位お

り全部帽子をま深にかぶり大きなマスクをかけて顔をかくしておりました。先に娘のリュックから始めました。ようやく紐が結べる位迄詰めてあったのですが、襖の戸を開けておきこれは置いていけと云って娘のリュックに入れてあった亡き夫の形見の背広とモーニングを足でけって押入れに入れられた時、娘は大声で泣き乍らこの服はお父さんの形見よ、どうして取り上げるの、内地で作ってたいして着てもいない大事な形見の品なのにと毒づきましたが、彼等は物も云わず取り上げてしまいました。こんな風にして泣き騒ぎ乍ら三、四十分位かかり、終ってから彼等は隣りの警察官舎に入っていきました。私は彼等の後をついて隣りの家に行ってみました。家の中に居たくなかったのです。隣りの奥さんは旦那さんが三、四日前からどこかに連れて行かれ子供達は男の子三、四人おりましたし、荷物も多いのですが彼らは朝からではあり疲れてもいたのでしょう。さっさと皆取り上げられて、それでも一時間位いて又次の家に移って行きました。あとで聞くと隣りではいいものは全部とり上げられ雑な物だけになったと奥さんは泣いておりました。家に戻って見ると娘はニコニコしています。お母さん見てごらんと指さす方を見ると、さっき彼らが糊で張りつけて行った襖の紙がフラフラしていて先ほど取り上げられたモーニングも背広もその外の着物も殆んど取り出しているではありませんか、生きてるうちは頭を使えよお母さん、とニヤニヤしています。だってどこへ入れるのよと云いますと、だからこうして入れる処を作ってるのといい、細工はりゅうりゅう仕上げをごろうじろといって尚も一生懸命やって朝迄に取り上げられた毛糸の服も無事一杯につめこみました。

さて荷物も出来た、食料は二日位前の夜に先々教えた朝鮮人の子の父親が先生米を持って来たよ、と五升程持ってきてくれました。有がとうと涙で御礼を云いました。その人は今日港まで様子を見に行って来たといい、金をどうしたのかと聞きますので着物の衿とモンペの紐に縫い込んだと話したら、そら大変だけどいい調べ方をしていたと私にはどこにかくせと云えないが、とに角モンペの紐や衿から出してどこかに上手にかくしなさいと注意してサヨウナラを云って帰って行きました。人の情をあれ程有がたく感じたのも苦しんでいた時だったから殊更に感じたのでしょう。当時のお金は百円札が一番大きな額でした。いよいよ出発の日です、朝早くから起きて残ってるものタンス、鏡台、一かん張りの食卓その他ろくなものはありませんが、ざっと掃除をして食事を作りました。金のかくし場所として玉子焼きの中に二枚の百円札を小さくたたんで油紙につつみ込み焼きました。おにぎりも十コ作り、のりに包んだもの海苔なしのおにぎりには百円さつを一枚づつ包みこみました。そして髪のまげの中にも二百円ばかり入れました。刃のあるものは一切持ってはいけないといわれましたが、私は少し前に四百五十円で買ったばかりで、まだ一度も使った事のない、さしみ庖丁が惜しくてそっと持って出たのですが、港にいく途中のバラ株の中につきさしておいて来ました。家の戸はちゃんと閉じてかぎをかけて来ました。こんどは港で待ちかまえている金しらべが始るのです。

港の集合時間は午後一時となっていましたが、一時など待っておられません。食事の外に米は生徒の親がくれた五升の米と着がえを二、三枚持つ事にしました。朝のうちに梱包荷物もリュックも馬車で港まで運んでありますのでもう心配はいりません。これが後でひどい目に会うことになるのですが、その時は嬉しさで一ぱいでした。

さて港について見ますと早く来た人達から持物しらべがはじまっていました。佐々木みなじと呼ばれました。娘と二人で出ていきました。「おや

じはどうした」と聞かれましたので、十年前に死亡しておりませんと答えますと、その隊員はその保安係の隊長でしたが、急に何死んだそれで母と子と二人だけで暮して来たのか、と聞きますので、そうですと答えますと急に態度が変ってえらいものだ朝鮮だったら表彰者だ等といいながら調べなくてもいいのだが一応は調べなければと云って形ばかりモンペの縁に手をかけるまねをし、金はいくらあると聞きますので八百円ですと財布を見せました。娘はお前のお母さんはえらい人だよ、親孝行しなさいと云ってきかせてまだ食事前だったら出して食べなさいと、今までにない位の待遇を受け自分も私共の控え場所に一緒に入って来て学校の先生と御医者さんには感謝をしなければならない等世間話をして三十分ばかりおりました。私は外の同じ船にのる人達より後から行ったのに先に調べがすんだので外の人達から親類ですかと聞かれました。

まだまだ沢山話す事がありますけれど疲れました。これを書き乍ら五十年前のあの日の事を書くのに胸がどきどきしますし、夜も眠れなくなります。船が機関に故障を起して二十そう位一緒に出たのに私共の船だけは次の日一日波に洗われながらすっかり死ぬ覚悟をきめた話。ようやく次の日皆が強風にさらされて港に逃げ込んだ日の事など、結局その船にいや気がさして来て船頭が船を売って逃げてしまった事。十月七日に家を出て約束の下関までは行けず十月の二十六日に福岡の小さい港、名前も忘れてしまいましたが……、に到着した事など思い出します。

戦争はいやです、絶対にさけて貰いたいと今、切に平和を祈っております。

附　記

昨年四月二十六日脳梗膜下頭血腫を患い、船橋の丸い建物船橋医院で丸坊主になって取りのぞく手術をして頂きました。

それ以来、一日毎に物忘れというより呆けて来たのでしょう、段々何も分らなくなり文字も忘れ、人の名前も泊り込んだ朝鮮の名前も忘れてしまいました。それでも一緒に逃げて来た先生の一人は、三年位前まで佐渡で校長をしており、今も健在でおり一緒に勤めた先生方も九州の福岡に一人、川内市に一人、八戸に一人、福島にも生存しております。

私も八十四年生きました。明日の事はわかりません。生きているうちにようやくこれだけまとめました。